



○婦人問題で○

深尾凱子氏 (読売新聞編集委員) が講演

160人が熱心に聴講

婦人問題の解決はどのように
と十月二十八日、県主催の婦人問題講演会が社会福祉センターで開かれ、約百六十人の婦人が熱心に聴き入っていました。

講師は、今年七月ケニアのナイロビ世界婦人会議をはじめ、過去二回の世界婦人会議に特派員として参加した読売新聞編集委員の深尾凱子氏。「女たちの昨日・今日・明日」と題して、それぞれの国の婦人問題や、国際婦人年をきっかけとした運動など、一時間半にわたって講演しました。

講演内容は――

一九七五年の国際婦人年以降、婦人の意識改革運動が世界レベルで進められ、十年前に比べ意識は大きく変化しています。

世界から百六十カ国の人々が集まったナイロビ世界婦人会議を取材する中、開催地のケニアの婦人の問題は、薪拾いと水くみをなくすことであり、それぞれの国で事情は大きく違っているようです。

日本の場合をみると、明治の初めごろは、その八割が第一次産業に従事しており、女性は男性とまったく同じにたくましく働いていたわけで、長い歴史のものさしで見ると、働く女性が増えた現在とは、婦人問題解決はどのようにと、160人が熱心に聴講した

元にもどったとも言えるでしょう。その原因は、人生が長くなったこと、電化製品の普及、核家族化、高学歴化などが挙げられています。そして、男は仕事、女は家庭という十年前の意識は大きく変わってきているようです。また、男女差別定年、結婚したら解雇するなど企業も徐々に減ってきています。メキシコで開かれた世界婦人会議のとき、フィンランドの女性が「世界中は今、資源で大騒ぎをしているが、人も大切な資源です。」

その半数を活用しなければ繁栄するはずがない」と言ったことが、とても印象的でした。日本に比べアメリカでは、意図的に女性差別をなくそうという法律が、早くから出来ていました。この十年をとっても、政府や企業が先頭に立って取り組んできています。

婦人問題解決のためには、各国各様、創意工夫が必要です。国際婦人年から十年、そして西暦二千年に向けて「男と女のための十五年」が続きます。政府が先頭に立って行ってきたアメリカは、外科的に進めてきたと言えるでしょう。日本の場合は、風土としてそれはすぐいけません。漢方薬でも飲んで、気がついたらよくなったというような方法で、婦人問題の解決を進めていくことが大切ではないでしょうか。この十年で大きく変わってきました。今後十五年、創意工夫を凝らしてやっていきましょう。

「観光物産まつり」

にぎわい

市内の名産品を集めた「第十回市観光物産まつり」(市商工会主催)が十一月三日、四日の両日市民体育館で開かれ、多くの買物客でにぎわいました。

初日の三日に小笠原市長、吉村雅男商工会長らがテープカットをして開祭。

会場には、新鮮な野菜や果物、ジャコや干物などの海産物、芋ケンピやうなぎのかば焼きなどの食品から、木竹細工、打ち刃物なども展示。土曜市組合はおもちの

実演販売。そのほか、NTT、郵便局のコーナーも。

市鍛造組合の無料包丁研ぎコーナーも好評で、また米消費拡大コーナーでは、工夫を凝らした米料理が並べられ、主婦の興味を引いていました。

いっぽう舞台では、龍馬維新大鼓や日本舞踊も披露され、まつりを盛り上げていました。



買物客でにぎわった物産まつり